

平成22年 4月19日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720192

研究課題名（和文） ワイマル期ドイツにおける右翼労働運動の展開に関する実証的研究

研究課題名（英文） An empirical study on development of the right-wing labor movement in the Weimar Republic

研究代表者

原田 昌博 (HARADA MASAHIRO)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：60320032

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ワイマル期ドイツの右翼陣営内での労働運動の発生・展開過程をドイツの公文書館に保管されている一次史料に基づき実証的に分析することを目的とするものである。本研究の出発点となる仮説は、ワイマル期ドイツでは、政治的左翼だけでなく、ナチズム運動や復古的保守陣営などの政治的右翼もまた労働組合など様々な組織を結成して労働者獲得に乗り出していたということである。包括的な「右翼労働運動」をキー概念に、右翼陣営内の各労働者組織の思想・組織構造・活動状況を可能な限り明らかにすることで、ワイマル期の政治的右翼の労働者獲得政策を具体層で捉え、ナチズムと労働者をつなぐ一つの回路を浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to analyze formation and development of the right-wing labor movement in the Weimar Republic empirically on the basis of the primary sources that are kept in the archives in Germany. The hypothesis that formed the starting point of this study was as follows: In the Weimar Republic not only the left-wing, but also the right-wing movement such as the National Socialist and the reactionary conservative tried to acquire the backing of workers by organizing trade union or such like. Using the comprehensive key concept “the right-wing labor movement”, this study focuses on the ideologies, the organizational structures and the activities of the worker’s organizations of the right wing in the Weimar Republic and explain its labor policies more concretely. As a result it could bring out a relationship between the National Socialism and the German workers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	270,000	1,970,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：西洋史・西欧史

キーワード：ワイマル共和国、右翼労働運動、ナチズム運動、フェルキッシュ運動

1. 研究開始当初の背景

ナチ党はワイマル共和国時代のドイツで選挙による議席拡大を通じて成長し、1933年1月に政権を獲得した。ドイツ近現代史研究において「なぜナチ党が政権を獲得できたのか」、「なぜワイマルの後にナチズムがやってきたのか」という問いかけは、そのアクチュアリティを失っていない。むしろこの問いかけに答えるべく、今なお研究者は一方で史料を発掘・解釈することで、より実証的な研究を目指し、また他方で積み上げられた実証研究を踏まえた包括的・一般的な解釈モデルを提示しようとしている。

ナチ党（ナチス）の正式名称は「国民社会主義ドイツ労働者党」という。ナチズムの支持基盤に関するこれまでの研究の多くは、この党が社会的中間層（商店主・手工業者・農民・官吏・サラリーマンなど）を支持基盤としていた点を強調してきた。それと同時に、ナチ党の労働者への態度を「デマゴギー」とみなすことで「労働者党」という名称のもつ意味を真剣に検討してこなかった。しかし、ナチズムの社会的基盤に関する近年の数量的・統計的研究は、ナチ党の支持基盤を従来のように中間層に限定せず、ナチ党が労働者層からも広く支持を集めた国民諸階層の結集運動であったと指摘している。

これら国内外の研究はナチ党内における労働者党员・投票者の数量的実態や、ナチ党の政策の一端としての「労働者政策」を取り上げた点で戦後のナチズム研究に転換を迫るものであったが、他方でナチズムを支持した労働者がどのようなタイプの労働者であったのかという問いに答えるものではなかった。本研究代表者はこれまでワイマル期ナチズム運動唯一の被用者組織であったナチス経営細胞組織（Nationalsozialistische Betriebszellen-Organisation: NSBO）を主たる研究対象として、この組織の思想・成立過程・活動を一次史料に基づいて検討することで、ワイマル期における「ナチズムと労働者」の接点を解明しようと試みてきた。その際に明らかになったのは、この組織にはナチ党外の右翼・民族至上主義的運動からかなりの労働者が合流していたという点であった。

労働者と聞けば「マルクス主義」をイメージし、さらにマルクス主義とナチズムの間の厳然たる敵対関係をこれに重ね合わせることで「労働者＝ナチズムの防波堤」と捉える

ことがこれまでのナチズム研究の暗黙の前提であったとあってよい。これがナチスの労働者への態度を「デマゴギー」とみなす背景にあった。確かに、労働者に基盤を置く社会民主党や共産党がナチ党の政権獲得に最後まで抵抗していたことは事実である。しかし、これまでの研究を通して指摘したように、総体としての労働者「層」がナチズムと反目していたと捉え、ナチ党＝中間層政党とみなすことは近年の研究状況からもはやできない。それどころか、ワイマル共和国期のドイツでは当初より右翼・民族至上主義の運動もまた労働者の獲得に乗り出し、やがてそれがナチズムへと合流していく「右翼労働運動」とも呼べるような系譜が存在していたというのが本研究の出発点をなす仮説である。

2. 研究の目的

本研究は、ワイマル期のドイツ社会においては政治的左翼だけでなく、政治的右翼もまた様々な組織を結成して労働者獲得に乗り出していた点に着目し、ナチズムを含む包括的な「右翼労働運動」をキー概念に、この概念の下で類型化される様々な組織を一次史料に基づき実証的に分析し、それらを具体相で捉えていくことを目的とする。

本研究では、研究代表者のこれまでの研究成果をさらに発展させ、広くナチズム運動外の右翼労働運動組織にも視野を拡大することで、右翼労働運動がいかんして労働者獲得を目指し、また労働者がなぜ、そしていかんして右翼運動にコミットしていったかを明らかにしようとしたが、それは、右翼労働運動のメンバーがその後ナチズム運動と接点を持っていた点に鑑みても、本研究の射程がワイマル期ドイツにおけるナチズムと労働者を結ぶ「回路」を捉える重要な鍵になるものと思われるからである。この「回路」を浮き彫りにすることで、ナチズムを国民的結集運動とみなす近年の研究の主張を補強し、ナチズムの台頭原因解明の一助になればというのがこの研究の意図するところである。

研究期間内において、本研究が明らかにしたい内容は以下の2点であった。第1に、右翼労働運動に分類されるいくつかの具体的な組織を取り上げ、その組織構造、思想・活動目的、活動実態を解明することである。第2に、第1点目の活動で得た成果に基づき、これらの右翼労働運動の特色を整理したう

えで、ナチズム運動との接点・関係を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究は、ドイツの公文書館に保管されている一次史料にアプローチし、それを積極的に用いることで、より実証性の高い研究を目指すものである。このため、ドイツの公文書館での史料調査・収集、その分析と総合が研究の主たる方法となる。

その際、「右翼労働運動」の具体的な組織をナチズム運動を軸に以下の3つに大別し、具体的な研究・分析対象とした。

(1) ナチズム運動内の労働者組織。既出のナチス経営細胞組織 (NSBO) が代表的である。

(2) ナチズム運動外でナチ党員が関わった労働者組織。「フェルキッシュ闘争労働組合 (VKG)」は最も著名な事例である。

(3) ナチスとは基本的に異なる右翼・保守的な労働者組織。「シュタールヘルム自助組合 (Stahlhelm-Selbsthilfe)」、「ドイツ国民的労働者同盟 (Deutschnationaler Arbeiterbund)」、「ドイツ援助会労働組合 (Gewerkschaft Deutsche Hilfe)」などが挙げられる。

このうち、すでに研究成果を発表している

(1)を除く(2)と(3)に関する史料収集と分析が本研究の主たる課題となる。

本研究は2007年度より3年にわたり以下のような活動を行った。

【2007年度】

当該時期のナチズム・右翼運動およびドイツ労働運動に関する国内外の研究文献を整備・講読していくとともに、8月から9月にかけて渡独し、海外調査を行った。その際には、ベルリンの連邦文書館 (Bundesarchiv) や国立図書館 (Staatsbibliothek) を中心に主として「フェルキッシュ労働組合」に関する一次史料 (組織規約、パンフレット類、内部文書、書簡、警察報告など) を収集した。また、日本国内の研究機関に保存されている当時の政党機関紙・新聞などの公刊史料の収集も行った。

【2008年度】

前年度に収集した史料の分析を進め、その成果を雑誌論文に公表した。同時に、前年に引き続いて再度ドイツでの海外調査を実施し、ベルリンの連邦文書館や国立図書館を中心に「ドイツ援助会労働組合」ならびに「シュタールヘルム自助組合」に関する一次史料の収集にあたった。また、同じく前年と同様に日本国内の研究機関に保存されている当時の政党機関紙・新聞などの公刊史料の収集

にも努めた。

【2009年度】

前年度に収集した史料のうち、「ドイツ援助会労働組合」に関する研究成果を雑誌論文として発表するとともに、「シュタールヘルム自助組合」に関する史料分析を進めた。また、本研究の内容の一部を学会で報告することでその成果を広く公表した。さらに、年度後半には前年度までのワイマル期ドイツにおける「右翼労働運動」の3類型に属する諸組織の具体的な分析を踏まえ、それぞれの特色を比較検討して3つの類型の共通点と差異を明らかにし、この考察を通じて「右翼労働運動」概念を具体化しようと努めた。

4. 研究成果

本研究では、2度の渡独により、ワイマル期ドイツにおける右翼労働運動内のいくつかの代表的な組織に関する史料を調査し、体系的に収集した。本研究により収集された史料はこれまで未使用のものがほとんどであり、それを積極的に用いて実証的な分析を行うという当初の目的は達成されたといえよう。

本研究の直接的な成果としては、これまで全く未知であった「フェルキッシュ闘争労働組合」および「ドイツ援助会労働組合」の思想・形成過程・実態を明らかにするに至ったことが挙げられる。「シュタールヘルム自助組合」関連の史料については非常に多岐に亘るため、現在も分析を継続している状態である。これについては鋭意分析を進め、可能な限り早期にその成果を公表する予定である。また、想定以上の大部な史料の存在が確認されたため、「ドイツ国民労働者同盟」に関しては史料状況は凡そ把握できたものの、残念ながら具体的な収集は次回の渡独に譲らざるを得なかった。とはいえ、これまでまったく未知であったワイマル期ドイツの右翼労働者組織・労働組合に関して実証的分析による解明を行った研究はわが国のみならず、ドイツにおいてもこれまで皆無であったことを考えると、本研究は一定度の成果を達成できたといつてよいだろう。「シュタールヘルム自助組合」ならびに「ドイツ国民労働者同盟」に関する研究をさらに進めていくことで、「右翼労働運動」を総括するすることが今後の残された課題となる。このため、現段階では中間的なものにならざるをえないが、本研究の結論を述べるならば以下になる。

第一次世界大戦後のドイツには、革命・敗戦・社会主義・新生共和国などへの反発から数多くの右翼・復古主義的政党・政治組織が

誕生したが、これらの組織も広範な大衆支持獲得や自陣営内の労働者への配慮などから労働者問題に無関心ではいられなかった。その結果、右翼・復古主義的政党・政治組織内には労働組合あるいは労働者問題を扱う組織が結成されることになり、これらはその主義主張や国家像に違いを示しながらも、全体としては「右翼労働運動」とも呼ぶべき特徴を有するに至った。その代表的な組織が、本研究が分析対象として史料発掘に努めた「フェルキッシュ闘争労働組合」、「ドイツ援助会労働組合」、「シュタールヘルム自助組合」、「ドイツ国民労働同盟」などであった。以上の組織は、右翼過激主義的、民族至上主義的、あるいは復古主義的など、その立場はさまざまであったが、ナショナリスティックな主張を前面に押し出しながらマルクス主義的な階級闘争を否定し、またワイマル体制やヴェルサイユ体制の打破が労働者の解放につながるというロジックを用いた（ナチスに近い組織にはこれに明確な反ユダヤ主義も加わる）。その反面、被用者の「階級利益」の擁護においては時に闘争的にもなり、その実践の中で経済平和的な黄色組合とも一線を画していった。確かに右翼労働運動は左翼労働運動に比して組織的には不安定で、左翼労働運動に対抗できるほどには成長できなかったが、ワイマル期ドイツを通じて経営内活動を展開し、離合集散を繰り返しながら、一部は最終的にナチズム運動（NSBO）に合流していったのである。

本研究の特色をあらためて指摘するとすれば、次の2点となるであろう。

(1) これまで等閑視されてきたワイマル期ドイツにおける「右翼労働組合運動」の存在に着目し、その成立過程、思想、活動を明らかにするとともに、「右翼労働組合運動」とナチズム運動との接点を指摘しようとした。

(2) ドイツの公文書館に保管されている一次史料（組織規約、パンフレット類、内部文書、書簡、警察報告など）にアプローチし、それを積極的に用いることで、より実証性の高い研究を目指した。

本研究により、ワイマル期ドイツではおそらく様々な労働運動の形態が存在し、それは左翼的（マルクス主義的）性格のものだけでなく、ナショナリスティックで国粹的なものも含まれていたことが明らかになった。しかも、それらがワイマル共和国後半に成長していくナチズム運動と接点をもっていた点、さらにその一部がナチズム運動へ合流していった点もある程度導き出されたものと考え

られる。ナチズムと労働者の関係、特にナチス経営細胞組織については、ドイツでは1980年代以降にGマイやVクラッツェンベルク、さらにJボンスの重要な研究が相次いで発表され、また日本でも本研究代表者が『ナチズムと労働者』（勁草書房、2004年）を発表するなどその実態解明が進んでいる。しかし、ワイマル期の「右翼労働運動」の実態、およびこの運動とナチズム運動の関係に関する研究はわが国はもとより、ドイツにおいてもほとんど存在しておらず、本研究課題はこの点で先駆的なものであった。

上述のように、戦後のナチズム研究において、労働者層は「ナチズムの防波堤」とみなされてきたが、本研究を通じて一部であれ、この説明には該当しない労働者層の存在が照射されることになったといえるだろう。これにより、ワイマル期のナチズム運動が中産階級のみならず、広く労働者層をも取り込んだ統合運動であった点が明らかにされるのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 原田昌博、右翼政治犯救援活動と「労働組合」—ワイマル期ドイツにおける右翼労働運動の一断面—、西洋史学報、査読有、37号、2010、147-172。
- ② 原田昌博、ワイマル期ドイツにおけるフェルキッシュ運動と「労働組合」、史学研究、査読有、260号、2008、67-87。

〔学会発表〕（計1件）

- ① 原田昌博、フェルキッシュ労働組合からナチス経営細胞へ—ワイマル期ドイツにおける「右翼労働運動」をめぐる—、第14回ワークショップ西洋史・大阪、2009年6月27日、大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田 昌博 (HARADA MASAHIRO)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：60320032

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし